

資料提供

石川県立歴史博物館 普及課

T E L : 076-262-3417

E-mail : rekihaku@pref.ishikawa.lg.jp

U R L : <https://www.ishikawa-rekihaku.jp/>

歴史博物館の令和8年度春季特別展「鷹と加賀前田家」についてご案内いたしますので、報道等により広くご案内くださいますよう、よろしく願いいたします。

石川県立歴史博物館 令和8年度春季特別展 「鷹と加賀前田家」開催概要

1. 名 称 令和8年度春季特別展「鷹と加賀前田家」
2. 会 期 令和8年4月25日（土）～6月7日（日）【44日間】会期中無休
3. 開館時間 9:00～17:00（入場は16:30まで）
4. 会 場 石川県立歴史博物館 1棟2階 特別展示室・企画展示室
5. 主 催 石川県立歴史博物館
6. 特別協力 公益財団法人前田育徳会、北國新聞社
7. 後 援 金沢市教育委員会、NHK金沢放送局
8. 観 覧 料 一般1,200円（960円） 大学生・専門学校生960円（760円）
高校生以下無料
※（ ）は20名以上の団体料金、65歳以上は団体料金
※上記料金で常設展もあわせてご観覧いただけます
※障害者手帳または「ミライロID」ご提示の方および付添1名は無料

9. 趣 旨

「鷹」とは、オオタカ・ハイタカ・ハヤブサなどの猛禽類の総称です。古くから各時代の権力者は、飼いならした鷹を自在に操る狩猟「鷹狩」を行っていました。次第に鷹は権力の象徴として位置づけられ、江戸時代には将軍や大名が所有した鷹を「御鷹」と呼んでいました。

ほかの大家と同様、加賀前田家も多くの鷹を所有し、領内で鷹狩を行っていました。鷹狩は、大名のみで行うものではなく、その実施過程においては様々な人々が関わっていました。鷹狩に同行し、鷹を飼育・調教する鷹匠、鷹場を管理する鳥見役、雛である巣鷹を上納する鷹巣見役などの存在によって鷹狩が成り立っていたのです。

また、江戸時代、鷹および鷹が捕った鳥は贈答の対象となっており、これらの贈答儀礼は主従関係を確認する行為として武家社会のなかで重要な意味をもっていました。

本展覧会では、古文書・鷹道具・絵画などの多彩な資料を読み解き、鷹狩、鷹の飼育・調教、鷹儀礼の実態から、鷹をめぐる前田家の歴史を明らかにしていきます。

10. 展示構成

- 序章 江戸時代における鷹狩
- 第1章 鷹場と環境
- 第2章 藩主と鷹狩
- 第3章 鷹狩を支えた人々
- 第4章 鷹を飼う
- 第5章 鷹をめぐる贈答儀礼
- 終章 近代へつづく鷹狩

11. 関連イベント

①石川の歴史遺産セミナー（リレー講義）「加賀前田家における鷹狩と鷹の献上」

第1回 5月2日（土）13:30～15:00

演題：「加賀藩の鷹場」

講師：武井弘一氏（金沢大学人間社会研究域学校教育系教授）

第2回 5月16日（土）13:30～15:00

演題：「加賀前田家の「御鷹」—鷹狩と鷹の調教」

講師：林亮太（当館学芸主任）

第3回 5月30日（土）13:30～15:00

演題：「加賀藩前田家のハヤブサ献上」

講師：越坂裕太氏（徳島大学総合科学部講師）

※1回ずつの受講が可能です。要申込。聴講無料。

定員：各回50名

会場：当館ワークショップルーム

申込締切：第1回4月20日（月）／第2回5月7日（木）／第3回5月18日（月）必着

申込方法：当館ホームページのイベント参加申込フォームまたは往復はがきにて

②ワークショップ「放鷹術実演・鷹匠体験」

鷹匠による伝統的な諏訪流の放鷹術すわりゅう ほうようじゆつを間近で見学し、実演後に鷹を腕にのせる体験会を開催。

日程：4月26日（日）・5月10日（日）

時間：各日2部開催 午前の部 10:00～／午後の部 14:00～ ※実演は各回約40分

講師：吉田剛之氏（株式会社鷹丸／NPO法人日本放鷹協会会員）

※体験のみ要申込（実演の見学は申込不要）。参加無料。小学生以下は保護者同伴。

荒天中止。

定員：体験は各回40名

会場：本多の森公園

申込締切：4月26日（日）開催分は4月20日（月）必着

5月10日（日）開催分は4月30日（木）必着

申込方法：当館ホームページのイベント参加申込フォームまたは往復はがきにて

③スペシャルトーク「もっと知りたい！鷹匠の世界」

現役の鷹匠をお招きし、鷹の訓練方法やその道具についてなど、知られざる「鷹匠」の世界をご紹介します。

日時：5月24日（日）13：30～15：00

講師：吉田剛之氏（株式会社鷹丸／NPO 法人日本放鷹協会会員）

※要申込。聴講無料。放鷹実演はありませんので、ご注意ください。

定員：50名

会場：当館ワークショップルーム

申込締切：5月14日（木）必着

申込方法：当館ホームページのイベント参加申込フォームまたは往復はがきにて

④学芸員による展示解説

日時：4月25日（土） 13:30～14:30

5月19日（火）・5月30日（土） 10:30～11:30

講師：林亮太（当館学芸主任）

※申込不要（当日先着順）。聴講無料（特別展の観覧料が必要です）。

会場：当館特別展示室・企画展示室

12. 主な出品資料

序章 江戸時代における鷹狩

各時代の権力者に愛好された鷹狩。江戸時代の将軍・大名も例外ではなく、多くの鷹を所有し、鷹狩を行っていました。そして、人々が躍動する鷹狩の様子は格好の画題でもありました。序章では、鷹狩図や鷹道具を描いた資料から、江戸時代における鷹狩について視覚的に紹介します。



鷹狩図屏風 久隅守景筆 江戸時代（17世紀）日東紡績株式会社蔵

江戸時代前期の絵師・久隅守景（くすみもりかげ 生没年不詳）による鷹狩図の名品。8曲1双の画面に水辺の田園風景が広がり、鷹狩に従事する鷹匠や餌指・犬牽の姿や、白鳥や鶴・雁・鴨・鷺・雉子などを仕留めるオオタカやハイタカの様がいきいきと描かれる。本作の制作時期は不詳だが、守景が加賀前田家の庇護を受け、金沢に逗留した晩年の作である可能性が提示されている。代々、国元で加賀藩の御用をつとめた狩野派絵師・梅田家に本作の模写が伝わったことから、当地とゆかりが深い作品と考えられる。

第1章 鷹場と環境

鷹場（たかば）とは鷹狩を行う場所のことをいいます。前田家は、領内の鷹場のほか、近世前期には将軍から拝領した江戸近郊の鷹場で鷹狩を行っていました。江戸時代は新田開発が各地で行われた時代でもありましたが、徐々に開発の手は鳥の棲みかであった鷹場内にも及び、獲物となる鳥がいなくなるなどの環境問題も浮上しました。本章では、鷹場の範囲や鷹場の環境維持の実態をみていきます。



金浦東蚊ヶ爪村領請高新開之内草附場所分間絵図 万延元年（1860）9月 本館蔵

東蚊ヶ爪村（現在の金沢市東蚊爪町）領内の新開地、真菰や葦が生えていた草付の場所を示した絵図。鷹場内にあった東蚊爪村などの河北潟周辺地域は、川縁・不湖に草が生い茂っており、そこは鳥の棲みかでもあった。加賀藩では、広範囲で新田開発が行われたが、本絵図からも草付の場所が水田化（黄色部分）していることが読み取れる。新開により草付の場所が減少したが、百姓はその分「見替地」（ピンク色部分）を造成し、そこに草を植えていた。鷹場の環境維持のために鳥の棲みかを確保するようにしていたことがわかる。

第2章 藩主と鷹狩

藩主前田家の当主は、家臣や鷹匠を引き連れ、領内で鷹狩を頻繁に行いました。鷹狩は藩主にとって身近な狩猟の一つであり、実際に使用した道具も遺されています。ここでは、鷹道具、古文書を中心に藩主の鷹狩の実態を紹介します。あわせて、前田家に遺る鷹や鷹狩を題材とした絵画から鷹への関心のありように迫ります。



鈴板 江戸時代（19世紀）公益財団法人前田育徳会蔵

鈴板とは、鷹の尾羽の鈴が響きやすくするために付けた板のことである。鷹には、獲物をつかんで草むらなどに入り込んだ時、居場所を特定するために鈴を付けていた。鈴板は、象牙・水牛の角・鯉のエラ蓋で作られることが多く、本資料は水牛の角を加工したものである。「松平加賀守」と筋彫りした後、金で文字を書いている。なお、「松平」は藩主前田家が将軍から与えられた称号で、「加賀守」は受領名である。



架鷹図屏風 江戸時代（17世紀） 公益財団法人前田育徳会蔵

押絵貼屏風の形式をとり、止まり木である架はこに繋がれた12居もとの鷹が描かれる。オオタカの幼鳥・若鳥・成鳥、ハイタカやハヤブサといった鳥種や成長段階の違いに気を配り、羽の色や生え変わりの様を表現する。上部の賛きんは元和期（1615～24）に加賀前田家3代・利常（1593～1658）の庇護を受けたと考えられる明人・王伯子（字は國鼎）による。もとは加賀前田家2代・利長（1562～1614）の菩提寺である高岡・瑞龍寺ずいりゅうじに伝来し、利常の寄進品として知られてきた。



松に大鷹図 前田重教筆 江戸時代（18世紀）
金沢市・尾山神社蔵

もとは4面からなる襖であり、現状は2面分を貼り合わせたまくり2枚の状態である。展示は松にとまるオオタカを捉えた2面分で、松の筆勢のある大胆な描写、羽毛の毛描きなど細部まで行き届いたオオタカの描写が見どころである。

作者は加賀前田家10代・重教（1741～1786）。弟の11代・治脩（1745～1810）の日記『太梁公日記』より、もとは金沢城二の丸御殿おくちまきの奥向で使用されていた襖絵で、明和8年（1771）12月に治脩が重教より拝領したことが判明する。

第3章 鷹狩を支えた人々

鷹狩は、様々な人々のはたらきによって成り立っていました。本章では、鷹の飼育・調教を担当した鷹匠たかじょう、鷹の餌を上納した餌指役えさしやく、鷹場の環境管理を担当した鳥見役とりみやく、幼鳥である巣鷹を上納した鷹巣見役たかすみやく、および巣鷹御用すだかごようをつとめた百姓について紹介します。



鷹毛羽図解 元禄5年(1692) 個人蔵

加賀藩の鷹匠^{よだきだひろ}依田貞広から同じく鷹匠^{うのしちのすけ}の宇野七之佑へ宛てた鷹書^{とうしょ}の一種。鷹の羽一つひとつの名前が細かく記されている。依田家は、古くから前田家に仕えた鷹匠で多くの鷹書を所蔵する家であった。宇野家も、前田家の鷹匠のなかでは高禄^{こうろく}の鷹匠であり、七之佑は享保期に鷹の治療を行う鷹方療治^{たかかたりようじやく}役などをつとめ、鷹の飼育に熟知していた人物である。

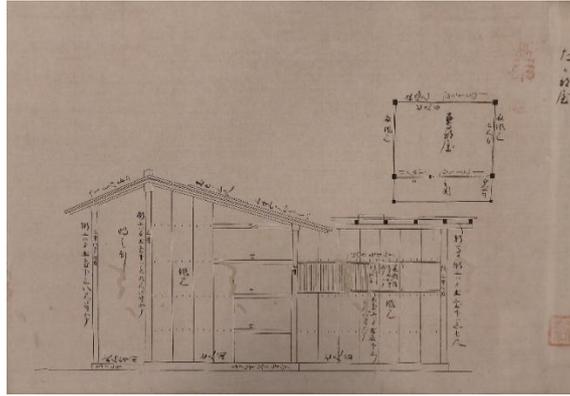


白鷹図 佐々木泉玄筆 万延元年(1860) 東京国立博物館蔵

安政4年(1856)11月に、加賀藩領内の黒津船^{くろづぶね}(現在の内灘町)で鷹匠の宇野富素によって捕獲された白鷹^{はくたか}を描いた作品。作者は、加賀藩御用絵師の佐々木泉玄^{ささきせんげん}で、万延元年(1860)に描かれた。この白鷹は、宇野富素に飼育・調教されたが、白鷹は神聖な鳥とされていたため、文久3年(1863)に医王山^{いおうぜん}に放たれた。

第4章 鷹を飼う

前田家が所有した鷹は、金沢城からほど近い、現在の金沢市石引^{いしびき}2、4丁目付近にあった鷹部屋で管理され、その周辺には鷹匠の屋敷が立ち並んでいました。鷹は生き物であるため、怪我をしたり、病気になったりすることがありました。また、飼育には大量の餌が必要でした。本章では、こうした鷹の飼育の実態をみていきます。



鷹部屋図（部分）弘化2年（1845）金沢市立玉川図書館近世史料館蔵

大工中村屋理助が所持していた鷹部屋図の写。鷹部屋の大きさは、玄関を含めると7尺（約2m10cm）四方であった。正面には「えさし窓」があり、ここから餌を入れていたことがわかる。また、後半部分には「産鷹部屋」も描かれている。「産鷹」とは、領内から上納される巣鷹のことを指すのだろう。こちらは7尺5寸（約2m25cm）四方で、鷹部屋より少し大きかった。

第5章 鷹をめぐる贈答儀礼

江戸時代、鷹は贈答の対象にもなっていました。鷹の産地をもつ大名は将軍に鷹を献上し、その鷹の一部は一定期間後、将軍から御三家、前田家などの有力大名に下賜されました。また、鷹狩で捕った鳥の贈答も武家社会で頻繁に行われていました。本章では、鷹をめぐる贈答儀礼の実態についてみていきます。



前田家帰国ノ図（「柳営儀式図絵」の内）弘化3年（1846）本館蔵

前田家が江戸から金沢へ帰国する時の様子を描いた図。左奥に描かれている大きな川は、戸田川（現在の荒川）であろう。右端の中程には、2居の鷹を据えた鷹匠2人が並んで描かれている。彩色からオオタカであると判断できる。前田家は、帰国時に将軍からオオタカを2居拝領することが慣例化していた。ただし、近世中後期の史料から藩主とは一緒に帰国していないことが確認でき、本図のように行列に加わっていたわけではない。作者は不明だが、将軍から「御鷹」を2居拝領していた情報を行列図に反映させたのかもしれない。

終章 近代へつづく鷹狩

幕末維新时期において、前田家の鷹場や鷹巣原の指定、鷹餌の供給制度なども変更、廃止されていきました。ただし、前田家は鷹を所有し続け、東京に転居後も別邸などで鷹狩をおこなっていました。終章では、こうした変革期における鷹に関する諸制度の変更・廃止、明治期における鷹狩の実態をみていきます。



15代 前田利嗣肖像写真 明治22年(1889) 前田土佐守家資料館蔵

前田家15代当主である前田利嗣^{としつぐ}の写真。利嗣は、安政5年(1858)4月、14代前田慶寧^{よしやす}の子として誕生した。明治7年(1874)7月に家督を継ぎ、明治21年12月には、宮内省主獵局の主獵官に就いた。利嗣は狩獵を好み、別邸の四谷・深川邸のほか、旧大名家の毛利氏の別邸などで鷹狩を行った。前田家に遺された鷹道具の一部は、比較的新しいものもあるので、利嗣の所用品も含まれていると考えられる。

令和8年度 春季特別展

鷹と加賀前田家

Falconry in Edo-Period Japan:
The Bond Between Hawks and People

令和8年 4/25(土) → 6/7(日) 会期中無休
9:00 → 17:00 展示室への入室は15:30まで

観覧料 一般1,200円(960円)、大学生・専門学校生960円(760円)、高校生以下無料
 ・()内は20名以上の団体料金、65歳以上は団体料金
 ・障害者手帳または「ミライロID」ご提示の方および付添1名は無料
 ・電子チケットは公式ホームページよりご購入いただけます(日時指定券ではございません)。
 ・上記料金で常設展もあわせてご覧いただけます。

主催 石川県立歴史博物館
 特別協力 公益財団法人前田育徳会、北國新聞社
 後援 金沢市教育委員会、NHK金沢放送局

日本博 JAPAN CULTURAL EXPO 2024

① 架鷹図屏風(部分) 王伯子賛 江戸時代(17世紀) 公益財団法人前田育徳会蔵
 ② 御鷹帳(部分) 明治2年(1869) 公益財団法人前田育徳会蔵
 ③④以外 柳宮儀式図絵(部分) 弘化3年(1846) 本館蔵

いしかわホレンガミュージアム
 石川県立歴史博物館
 ISHIKAWA PREFECTURAL MUSEUM OF HISTORY

チラシ画像